

チンパン棲艦ネ級♂

イボのない軍手

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バナナで燃料チャージするネ緑♂のお話。

目 次

パパ活（強制）に遭つたネ級♂	1
文明から遠ざかるネ級♂	13
鈍器に愛されたネ級♂	17
センチメンタルなネ級♂	22
バナナを失つたネ級♂	27
積載量に定評のあるネ級♂	33
馬並みのネ級♂	37
孔明になりたかつたネ級♂	42
酸っぱいネ級♂	49
設定を盛られまくるネ級♂	55

パパ活（強制）に遭つたネ級♂

目が覚めたら海の上に立つていた……いや、なにを言つているのかわからないが、それが事実だからどうしようもない。

今はつきりしていることは、どこを見渡しても水平線で、現状がまったく理解できることだけだ。

それと、右目をカバーのような何かに塞がれて前が見えないな。誰のイタズラかは知らないが、こういうのは本当に勘弁してほしい。

「な、なんで取れな——いつ!？」

俺の声が高くなってる？　しかも全身の肌が病的に白い……もう何がどうなつて——げえ、尻尾まで生えてるだと!?

なんだこれ……俺は悪の組織にでも改造されてしまつたのか？　いやいや、さすがにこんなことが現実に起ころははずもないな。

これは夢だ。きっと鮮明なだけの夢に違いない。

「…………」

腹立たしいほど天気がいいな。心地のいい風に、穏やかな海。

自分は孤独に強いと自負しているが、人の気配や生活音のない環境がこんなにも恐怖を感じるとは思わなかつた。現在地は不明、おまけに通信機器もないからどうにもならないときてる。

いつたい俺はどうすれば……。

こういうときは、体力のあるうちに水や食料を探すべきか？　たぶんそうだよな……ならとりあえず陸地、陸地を目指してみよう。

あれから一時間ほど大海原をさまよつた。

体を動かすことで本能的な恐怖を誤魔化しつつ、ついでに海の上をどれくらい動けるのかも軽く検証していた。

幸いにもこの体は、疲労を感じることなく海面を走ることができるらしい。まだ尻尾の感覚は掴めないが、これも時間さえあればなんとかなりそうな気がする。

ただ、水の上を歩ける謎については触れたりしない。夢ということでおスルーしておこう。

なんか超人になつたみたいで楽しくなつてきた……たまにはこんな夢も悪くないな。

そんなこんなで数分後、ついに念願の陸地を発見。無人島かと思い近づくと、砂浜に先住民……というか、見覚えのある三人の小人たちがいた。

「おお二人とも、あそこに見たこともない深海棲艦がいるのです！」
「むむ、しんしゅですかな？」

「……なあ、あいつおれたちがみえてないか？」

「それはありえません。もし我々が見えるのならとつくりに食べられているのですよ。まして深海棲艦など所詮はケダモノ。我らの存在を感知するなど不可能なのです」

「たしかに。よくみるとげせんなつらがまえをしておりますな」

「バナナとかすきそうだな」

「ふふ、チンパンには相応しいおやつなのです」

「「「ガハハハ!!」」

「……おーおー、好き勝手言いなさる」

「つ!？」

俺が深海棲艦？ 確かにこの体はそれっぽいし、あの子たちは妖精さんにそつくりではある。でも深海棲艦に妖精さんって……連想するのは艦隊これくしょんしかないよなあ。

でも俺の知っている妖精さんは初対面であんなこと言わない。言わないつたら言わないんだ！

……とりあえず、あの妖精らしき生意気なチビどもと接触してみよう。これが夢なら、きっと辻褄の合わない粗が見えてくるはずだ。

「ここにちは。チンパンでバナナが大好きな深海棲艦ですう。どうぞよろしく」

「…………」

「実は俺、現在地がわからなくて困っているんだ。なんたって下賤な面構えでケダモノだからなあ？ よかつたら『教授いただける』うれしいのだが」

「ひつ！」

「リ、リーダー！ こやつしやべつておりますぞ！」

「ことばまでりかいしてやがる。はなしがちがうじやねえか！」

「はう！ で、ではバナナを、バナナで餌付けを試みるのです！」

「その試みは後にしてほしい。それより君ら妖精さんだろ？ ハーマンがどこなのが教えてもらえないか？」

「…………わ、我々を、食べるのですか？」

「あいにくとバナナのほうが好きなんだ。しつこいようだが、俺は現在地がわからなくて困っている。これ三回目だぞ？ はよ教えろ」

「しんかいせいかんなのに？」

「……見た目はな。でも中身はただの人間なんだ」

「むむむ」

なにがむむむだ！ 本音はお前らみたいな口の悪いいちびつ子なんざおしりベンベンしてやりたいんだが、それで逃げられても困る。ただ気になるのは、一人だけ艦娘にそつくりな子がいることだ。左の子はどう見ても木曾にしか見えないし、声はもちろん、服装や口調もそのまんまだ。

右のヘルメットをかぶった子がむむむとほざいた奴だな。確か、艦娘を建造する画面で見た覚えがある……ような気がする。

最後に真ん中のリーダーと呼ばれたのが、たぶん羅針盤を回していた子だ。ゲームでは無駄にテンションが高くて、頭にヒヨコを乗せたヤツな。

てか、さつきから尻尾がチクチクする。他の妖精から小石でも投げ

られてんのか？

「まあいきなり信じろってのは難しいか。でもこのとおり敵対の意思は無い。だからその、物をぶつけるのはやめてくれないか？」

「わ、我々はなにもしていません。濡れ衣なのです！」

「うしろを見てみな。あんた、うたれてるぜ？」

「え？」

振り返ると、遠くで黒々としたサメのような怪物が、大きな口を開けて主砲を俺に向けていた。さつきからドカドカとうるさかつたのはコイツだつたらしい。

駆逐イ級。艦隊これくしょんのゲーム内ではそう呼ばれていた。いわゆる最弱の敵であり、いつもお世話になつていてる相手——つてガチで砲撃されてるじゃねーか！ 痛くないから気がつかなかつた。

この体が頑丈で助かつたが、まともに直撃を喰らつてビクともしないのはどういうことだ？ ゲームでもありえない気が……。

いや、それより今は忙しい。そういうのは後にしてもらおう。

「ふんっ」

「グギャ!!」

小走りで近づき、軽く蹴り飛ばして追い払つた——はずが、グシャリとイ級が粉碎。燃料が返り血のごとく飛び散り、誤つて一般人を小突いてしまつたサイヤ人の気持ちを味わつた。

なんとななく自分の正体に察しあつてゐるが、まさかこれほどのパワーとは想定外だ。これじやあ格上の深海棲艦と出会つたら終わりじやないか。ましてや姫級なんて想像もしたくない。

待て、なんで俺はイ級に撃たれた？ 少なくとも、見た目は深海棲艦のはず。

「もんどうむようでしたな。おなかまではないので？」

「正直に言うと俺にもわからない。ついさつき目覚めたばかりだし」「ならとつぜんへんいか？ むねもべつたんこだしなあ」

「突然変異……そうだ君らは鏡みたいなもの、なんてあるわけないよな」

「鏡ですか？ ありますよ。ほいつ」

あるんかい。そしていつ俺の肩に乗ったんだお前ら……でもまあ、ここはさすがの妖精さん。自分より大きな鏡をポツケから出すとは恐れ入る。おかげでようやく自分の姿を確認できるな。

鏡に映ったのは、かの有名な重巡洋艦ネ級の姿だった。

戦艦並みの性能を誇る美しい深海棲艦。長めの白髪にビキニのような黒い装甲。そして尻尾のように生えた二股の砲身が特徴的だ。ゲームではかなり面倒な存在なんだが、いざ自分がこうなってみると……まあなんだ、見た目はとても美しい。

先ほどから木曾妖精が俺の胸をペタペタと触り、首をかしげていた。それもそのはず、俺の顔や体形は女性に見えるが、胸にはふくらみがなく、腕がやや筋肉質でたくましい。

「じつはおとこだつたりしてな。うできんがすじばつてる」

「ただのひんにゆうでわ？ ちちのさいでせいべつをはかるなど、いささかぼうろんにすぎますぞ」

「班長に同意します。男性がこんな女性用水着みたいな恰好をしていたら、もはや手遅れの変態さんなのです」

「手遅れですいませんねえ？ こんなナリでも心は男だよ」

「……あ、はい」

「地味にリアルな反応はやめろ。目が覚めたらこの格好だつたんだ」

「口ではなんとでも言えます。でも我々は懐が広いので、あまり触れないようにしてあげるのですよ」「今ガツツリ触れただろうが！」

確かに深海棲艦も基本的なデザインは女性だもんない。

どうせ夢なんだし、こうなつたら股間に連装砲でも——ん？ そういえば、妖精さんは深海棲艦も改造できるのか？

……よし、まずはこの子たちの『機嫌をうかがってみよう。

チンパン扱いは許さんが、反応を見る限り会話には問題がないように思えた。ならば腰の低い対応で情報を引き出し、用済みになつたらおしりベンベンしてやればいい。

特に木曾妖精は念入りになあ？ グへへ。

「まあそんなことはどうでもいいさ。おまえはおれたちのてきじやあないつてことだろう？」

「お、おう」

「きっとこのあいはうんめいだ。それはおもわないカリーダー」

「しかし。こんかいばかりはただのぐうぜんではありますまい」

「……我々は深海棲艦など信用できませんが、感情で可能性を排除するほど愚かでもありません。あなたの上陸を許可するのですよ」

「あ、ああ。なんかよくわからないが助かるよ。ところで、この周辺海域の名称を教えてくれないか？」

「？」

「……あの島の名前とか、なんやら海とか名前があるだろ？ まづはそれを教えてほしいんだ」

「そんなの知らないのです。我々はリゾートを楽しんでいるだけで、人間の取り決めなど知つたこつちやないのです」

人に興味がなさそうな口ぶり……むしろ嫌つてている？

言葉は慎重に選んだほうがよさそうだな。

「なら海図とか、コンパスを貸してもらえた嬉しいんだが」

「こまつたゞじんですか。そのようなものはございませんぞ？」

「ございませんつて……ああなるほど。妖精さんならそんなものがなくとも、ちゃんと現在地がわかるつてことか」

「むりだぜ？ ラーベすらつくつてねえし、つくれなかつた。なんたつてしげんがねえからな！」

んんん?? ラーベとやらが何なのかは知らないが、この子たちはなにを言つてるんだ?

「……え、えーと理解力が足りなくてすまん。君らはリゾートでここにいるんだよな？ ならどうやつてここにきたんだ？」

「ひょうりゅうしてながれついたのがこのむじんとうだつただけですぞ？ せつかくだからリゾートをたのしんでおります」

「遭難してるじゃねーか！」

なにがリゾートだこの野郎!! 妖精が遭難してどうするよ……ああもう、夢なら早く醒めてくれ。

どれだけカンカンと照り付ける太陽に願つても、この変な夢が覚める気配はなかつた。

いくら神頼みしようとも状況は変わらない。俺には航海に関する専門知識はなく、妖精さんも当てにならないことが判明してしまつた。

海の男は星の動きで現在地を把握できるそうだが、真似したくてもどうしたらいいのかさっぱりわからない。だからこそ、俺は無我夢中で陸地を探した。深海棲艦とわかつた今となつては無意味かもしないが、当初は水とか食料が必要だと思つていたから。

そして当たり前だが、船は燃料がなければ動かない。それは深海棲艦だつて同じ……はずだよな？

さて、問題はこの大海原のどこで燃料を確保するかだ。

ふと体に付着していた返り血（燃料）を見て、イ級をココナツツの

ようにも喰らう自分の姿を想像してしまった。

「このよのおわりみてえなツラしてどうしたよ？ ほら、バナナでもくつてげんきだせ」

「…………ありがとう」

そりや浜辺で体育座りにもなるつてもんよ。妖精さんに出会えてウキウキしてたら、その妖精さんまで遭難してたんだもの……バナナうめえ。

「では外務大臣。よろしくなのです」

「まかせな」

「……が、外務大臣って、木曾じやないのか？」

「へえ、おれがキソにそつくりなことしつてるのか。ああそうそう、だいじんといつてもしごとがなかつたから、こんかいがはつしごとだ。よろしくたのむぜ！」

「どうよろしくするのかわからないが、よろしくな。でも君に外務大臣はちよつと違うんじゃない？ 血の氣多そうだし」

「むむむ！ これはないせいかんしようというやつですか？ われらをぐらうされるおつもりか！」

「じゃあむむむの子、君の肩書は？」

「せいびはんちようですぞ」

「せめて大臣で統一しろ」

「こいつらめんどくせえ。

「まあおちついでバナナをくえよ」

「……ありがとう」

「じゃあほんかいにはいるか。あんた、こまつてるよな？」

「そりや困つてるよ。現在地が不明で補給もできないからな」

「なんだそんなことかよ」

「そんなことつて、お前らも迷子だろ……俺だつて自分のことさえわからず、航海術の基本すら知らない。最低でも補給の目処が立たなければ、お前たちを故郷に運んでやることもできないんだぞ?」

「…………」

それ以前に経度も緯度もわかりませんがね!

くそ、頭が痛い。でも俺がなんとかしなくては……。

チビどもは當てにできないし、どうにか残った燃料を無駄にしない方法を考えるんだ。

……やはりイ級を探すか? 死ぬほど弱そうなヤツ。そう決意を固めて振り返ると、チビどもが円陣を組んで話し合っていた。まずあいつらからイ級がいそうな方向を教えてもらい、燃料を確保できないか試してみよう。しつかし、このバナナうめえな。

「またせたな」

「ん? ああ、相談は終わつたか?」

「おう。さつそくだけど、おれたちとけいやくしてく——しろ」

「なぜ言い直した。契約つてなによ?」

「いつしょにたたかおうぜ!」

「交渉力の欠如がヤバい……まあ一緒に戦うつていうのは、俺としても心強いけど

「きまりだな! いいつてよおまえら」

「「わー」「」

「?」

いきなり砂浜の奥から出るわ出るわ。様々な妖精さんが一斉に俺へと群がつてくる。その数は百や二百で収まらず、全身を埋め尽くしても足りないくらいだった。

「とつげきだー」

「おー」

「なにをするきさまら——お、おごごあつ!!」

「あんしんしてそいつらをうけいれてくれ。これからアンタはおれた
ちの『じゅじんなんだからな』

「ほゞあ!?

口から妖精たちが入つてくる。私は鼻から、と言わんばかりに穴と
いう穴から侵入されている。胃カメラよりはマシだが、体内を生物が
這いずる感覚はとんでもなく気味が悪かつた。

てかご主人つてなに？ 事前に契約内容を告げろアンポンタンど
もが！

——はんちよう、ばななをはつけん！

「むむ、しんかいせいかんのたいないにバナナが？ これはきつかい
な……しようさいがひつようですな。エーはんはそのバナナをもち
かえるように」

——りょうかい！

「それはさつき食つたやつだ！ ゴホ……まず、説明を、しろ」「なんの？」

「全部だバカチン！ 契約内容！ 体内へ侵入した理由！ このチビ
どもの数！ 最低限でいいから説明してくれよ……」

「単純な話、我々はものづくりやサポートが可能ですが、思念体ゆえに
依り代や宿主が必要となるのです」

「……宿主」

「正しくは同調できる存在を指します。人々はそんな特殊能力を持つ
人間を“提督”と呼びました。ですが、それも過去のお話。最後の“
提督”を失い、我々も帰る場所を失つたのです……」

最後の提督つて、わけがわからんな。ここは俺の知つている艦これ
の世界じゃないのか？ あの重婚だらけの廃人が巣くう、艦娘たちの
パラダイスじゃないのか。

「我々には資源を集める術がなく、このまま消えゆく運命でした。ですがこうしてあなたが現れたのです。『提督』の力を持ち、資源を集め、我々を宿すことができるあなたが！」

「俺が……？ でも、俺は深海棲艦だろ」

「我々と会話ができるほど同調できたのは、あなたを含めても歴史上で一人しかいません。誇つてかまわないのです」

「つまり、われらのぼうはていとなるけんりをさすけますぞ」

「てなわけで、よろしくなごしゅじん！ おれたちをやしなえ」「「やしなえー」」

いやあ、いきなり数百をこえる妖精のパパになれて、オジサン幸せだなあ……ってなるかボケ！ なんでそうなる？ 今回だけ協力すりや済む話なのに、なんの因果でこんなチビどもを養わねばならんのだ！

く……こいつら、揃いも揃つて憎たらしい笑顔を浮かべやがって。かわいいなあオイ。

「……養うのはともかく、まずは現在地の把握が先だつて何回言わせる気だ？ 俺も自分のことがわかつてないから、残った燃料でどれくらい移動できるのかさえわからない有様なんだ。だから予備の燃料を確保するか、最低限活動できる範囲を算出できなきや話にならない

い」

「こまつたごしゅじんですなあ。われらをあなどりすぎでわ？」

「な、なんだと……すでにわかっているのか？」

「ぐもんですな。ビーはん、シーはん、ほうこくせよ」

「あい。そういうがすごかつた」

「ばななくさかつた」

「ごまんぞくいただけましたかな？」

「お、そうだな。おいリーダー、このポンコツどもをクビにしろ！」

予想以上にダメダメで頭にくるぜ……でも泣き言なんて言つてら

れない。こうなつたらイ級を殺す機械と化しても生き抜いてやる。

文明から遠ざかるネ級♂

「ねんりようはおつけーぼくじょう。ばななでせいせいされるのをかくにん」

「ちくびをたいくうほうにかんそうする。はんちょーのきよかは……あとでもらう！」

「後にする。そして却下だ！」

「で、でもじようはんしんのぶそうがふあん！」

「……実はな、俺の乳首にはサテライトキヤノンが搭載されているんだ。だから心配はいらない」

「さてらいときやのん!? なんか、かつこいい！」

「だろ? だから乳首以外の武装について調べてくれないか?」

「まかせろー」

ふう……」いつらを放つておくと口クでもないことしゃがるな。あれから妖精たちに体を調べてもらい、情報が整備班長の元へと集まってきた。砂にはメモのような数式や謎の文字が並び、別人のように働く妖精たちに度肝を抜かれた気分だ。

乳首に執着するおバカもいるんだが、一生懸命に頑張っている姿を見てしまうと文句も言えない。

やがて、リーダー格の三人がそろつて俺の膝に乗ってきた。

「ご主人さま。結果が出たのです」

「その様子だと、なにかしら問題があるようだな」

「けつろんからもうしあげますと、ごしゅじんはバケモノですな」「それは、まあ深海棲艦だから」

「そう単純な意味ではありません。深海棲艦や艦娘の要素を持つた、人間にも最も近い生物である……というのが我々の見解なのです」

「……もう少し具体的に頼む」

「おれたちにもくわしいことがわからねえってことさ」

「仮定となりますますが、ご主人さまはゴリラ型の深海棲艦か、艦娘型チンパンジーの一択となるのです」

「バナナさえあればうごきますからな。さいこうにエコですぞ」

エコかどうかなんてどうでも——よくない、大切だつたわ。

しかしこいつら、どうあつても俺を人間扱いするつもりはないらしい。これを一時間近くにわたつて議論してたつてことだよな？ きつとゴリラかチンパンジーで意見が分かれたと見える。

納得はいかないが、燃料問題はバナナの残量と考えればいいのか。なら次は、安全で気軽に補給ができるようなパラダイスを探すんだ。そもそも、これこそが本来の目的なんだから。

条件は簡単、深海棲艦が弱い海域で、俺を受け入れてくれる優しい提督がいて、可愛らしい艦娘に囲まれた鎮守府がいい。

ダメ元でこれらの要望をリーダーたちに伝えてみようか。

「あ？」

外務大臣つたら、冗談ですょ、やだなーもう。

「す、すまない。安全な場所といつたら鎮守府しか思いつかなくてな。さつきもイ級から撃たれただろ？ 人間や艦娘だつて俺を見たら攻撃してくるはずで——つて俺には味方がいないのか」

「確かに深海棲艦は脅威ですが、今の艦娘たちにご主人さまを打ち倒す力はないのです」

「おいおい、それは艦娘を舐めすぎだ。練度の高い艦娘なら、駆逐艦でも俺の装甲なんて軽くぶち抜いてくるぞ？」

「ごしゅじんのそういうを？ ぎそうやせいびはおろか、ほきゆうすらままならぬというに……それはふかのうですな」

「『提督』が健在だった全盛期ならありえたかもですが、形だけの鎮守府にご主人さまを打ち破れる戦力は残つていないのでですよ」

「……さすがに、冗談だろ？」

「（ご）しゅじんはしらなかつたか。もうあたらしいかんむすはうまれない……じんるいのはいぼくはまぬがれねえのさ」

妖精さん曰く、つい最近とても大きな戦いがあつたそうだ。

その戦いで最後の提督と主力艦隊を失い、今では各地の鎮守府が敗北寸前まで追い詰められている。そして深海棲艦の圧倒的な物量を前に戦線は押し上げられ、艦娘の奮闘によつてなんとか防衛している状況なんだとか。

今や生き残つた艦娘だけが唯一の希望だが、新たな艦娘は生まれず、艦装や補給さえままならない日々が続いている。

——どうしてそんな大切な提督を最前線に向かわせたんだ？
そう尋ねたら、本人が自主的に出撃したのではなく、上層部の命令であつたらしい。

そう教えてくれたリーダーの表情は、暗い憎悪に満ちていた。

「……君らだけでも、新しい艦娘を建造できたんじやないのか？」
「しづい、ようせい、ていとく。このみつづがそろつてはじめてかんむすをけんぞうできますでな」

「世界はその核となる“提督”を失いました。それも深海棲艦だけではなく、人間は悪意によつて自らの希望を刈り取つたのです」

「……この広い世界で一人も残つていらないなんてありえるのか？　君らにも見落としがあるかも知れないだろ。ほら、俺みたいな例外だってあるわけだし」

「それが……わかつてしまふのですよ。今の我々にとつてご主人さまは最後の依り代。この絆を失つたとき、我々はこの世から消え去つてしまふでしょう」

どうせ夢を見るなら、いやラブからの重婚でコメディな艦これが見たかつた。こんな現実風味な苦痛のエッセンスはいらないんだよ……のほほんと艦娘を眺めるだけで満足だつてのに。

ああ、時雨に会いたい……遠くから眺めるだけでもかまわない。

できれば時雨に会つて触つて抱きしめて、ついでにカツコカリから駆け落ちもしたい。子供は野球チームを作れる人数で我慢するよ。まつたく、夢くらい気持ちよく見せてほしいもんだ。

「…………今の俺たちにできる最善策はなんだ？　保身に走るとしても、深海棲艦で埋まつた世界を生きていけるわけがない」

「そうですね。いかにご主人さまとはいえ、数百隻に囮まれば苦戦を免れません。まずは必要な道具をそろえて計画を練るのです！」
「苦戦どころか塵にされるわ。それで、道具を作るには資材が必要なんだよな？　どこでなにを集めればいい？」

「あれをもつてきてくだされ」

整備班長の指先が、海に浮かんだイ級の残骸を指し示す。
深海棲艦を持つてこいと？

「アレでいいのか？」

「ああ。ごしゅじんがしんかいせいかんをたおしてもちかえる。それをおれたちがかこうしてどうぐにかえるんだ。かんたんだろ？」

「わかりやすくていいな！　よーし、オジサン頑張っちゃうぞ～」

「海上では十分にお気をつけください。残念ながらご主人さまに見合う装備がないので、あそこにある岩などがおススメなのです」

「バナナを食つて岩で殴れと申すか……文明から遠ざかつていくな」「ここでそうびしていくかい？」

「……お、おう」

「ご主人にはお似合いですぞ！」と大笑いする整備班長のほっぺをムニムニしたあと、岩を放置して海上へと足を踏み出した。

鈍器に愛されたネ級♂

「うえ、まつず!!」

「はくなー」

「たんくにはけー」

ダメだ、燃料の直飲みはできない。

イ級の残骸を砂浜に運んでから、試しに燃料タンクを引きずり出して飲もうとしたが、とても飲めたもんじやなかつた。

こうなると現状の燃料補給はバナナのみ。さきほどバナナの残りを外務大臣に確認したところ、かき集めれば世界一周も夢ではないそうだ。途中で腐るだろ、という指摘はスルーされている。

それにしても、妖精さんの技術は魔法のようだつた。

始めは岩（メインウェポン）をくりぬいて器を作つてほしいと頼まれ、そこに謎の液体を流し込み、あれよあれよという間に道具を作り出してしまつ。

すでにイ級の残骸は俺の手にある燃料タンクだけで、全てのパーツが妖精さんの手によつて無駄なく加工された。

「ようせいれえだあ、かんせい」

「ようせいそなあ、つくつた」

「せかいいちず、かいておいた」

「みんなごくろうさまです。残りは使えそうな装備の補修にまわしてください」

「「「らじゅー!」」

それらをイ級の残骸からどうやつて作つたんですかねえ。さらつと世界地図を書いたとか抜かしてゐるし。いや、考えるだけ無駄か。妖精たちは俺の頭に謎の機械を設置したり、乳首と乳首の間にハンモックを設置したりと大忙しだつた。何度も引きちぎつてもしつこく

作りやがるので、俺はついに抵抗することをやめた。

「おお、なかなかいいできばえだな！」

「彼らのちからなればどうぜんでしょう。さて、バナナよし。きざいのどうさかくにんもしゅうりようしましたぞ」

「了解です。ではみんな、ご主人さまに乗り込むのです！」

「「わー」」

「つ!? ま、まで——おゞごあ!!」

入つてくるのはいいが、一人ずつ順番に入れつての！ 一斉に駆け込んできやがるから本当に困っている。

最後は乳首に繋いだハンモックに例の三人が乗り込み、お出かけの準備が整つたようだ。

「お前らがそこに乗るんかい」

「当然なのです。我々の肩には、ご主人さまと妖精の未来がかかつているのですから」

「このしりょうにあるサテライトキヤノンとはいつたい……」

「せんとうのサポートはおれにまかせな。がいむだいじんのなはだてじやないぜ」

「サポートしてくれるのはとても嬉しい……だが俺の装備が岩のままつてどういうことだ？ 大砲をよこせってんだよッ！」

「ご主人さまの怪力ですが、岩のほうが单装砲の威力を上回るのです。わがままはいけないので」

「わがまま、だと……？ 敵が遠距離からドカドカ撃つてくるのに、俺はバナナ食つて岩で殴りにいかなきやいけないんだぞ！ これをわがままと言ひ張るつもりか！」

「まあごしゅじん。おちついてバナナでもくえつて」

「……いただこう」

これめつちやうめえんだよなあ。

まあ元から戦闘は回避する予定だった。妖精さんがレーダーで誘導してくれるそうだから、あまり文句は言わないでおこう。

本音は俺だつて大砲をバンバン撃つてかつこよく戦つてみたいよ？でも俺の尻尾にある主砲は飾りだつたんだ。異常に硬いだけの鈍器ですと言われて真顔になつたつけな。

つまり、俺は遠距離から砲撃されたらなにもできないわけだ。

タイマンなら世界最強だなんて言われても、艦隊戦がメインなこの世界ではクソの足しにもなりやしない。

ただ、強い、固い、早いの三拍子がそろつているのもまた事実。敵対したら厄介な存在ではあるだろうな。

「（ご）主人さま。このまま鎮守府へ誘導しますけど、本当によろしいですか？」

「みんなで相談した結果だからな。でも撃沈されそうになつたら迷わず逃げるぞ」

妖精さんの見立てでは、人類はあと一年と持たないそうだ。いずれ世界は深海棲艦に支配されるわけで、そうなれば俺たちも同じように飲み込まれて終わる。

そこで妖精さんから提案されたのは、こつそりと艦娘への支援を行うことだつた。

まずは艦娘たちの動向を探り、支援を行えるかどうかの判断を下す。そして不可能と判断した場合は、切り捨てて別の計画を立てる考えもあるようだ。

ここには妖精界のエリートが集まつてゐるから、そう難しいことはないとのこと。それでも不安は拭えないが。

「……おれはごしゅじんが“ていとく”になればいいとおもつてんだけどなあ」

「それは断ると言つたはずだぞ？　ヘタすると深海棲艦が生まれてしまふかもしねない」

「確かにリスク一です。でも我々は新たなチンパンジーの誕生にも興味津々なのですよ！」

「……ごしゅじんのあくりよくをおわすれですかな？ チンパンジーではすじがとありますまい」

「チンパンと言つたらチンパンなのです！ ゴリラの大半は草食だと言つたではないですか！」

「むむむ！ ききずてなりませんなあ。いちぶのゴリラはざつしょくですぞ！ なんならどうぶつのにくをたべることもありますでな」「仕事だぞ外務大臣。俺が心優しい人間であることを教えてやれ」「いえないねえそんなことは。おれはうそをつきたくないんだ」

お前らはゴリラやチンパンジーが主人様でいいのか？

「さあケンカは後だチビども。俺はどつちに向かえばいい？」

「このまま西へ。あちらの方向へまつすぐお願ひなのです」

「ではけいかくどおり、はぐれしんかいせいかんをつけしだいほう
こくしますぞ」

「頼んだ。じゃあしつかり捕まつてろ」

走る、風を切るように。

この体は本当に速い。きっと駆逐艦にも負けないくらいの速度が
出ていると思う。

目的地までは単独行動を取るイ級やホ級などを強襲し、可能な限りの資材をかき集めていく。

そして俺が器（メインウェポン）を支え、開発班が解体を行うのだ。
だから海上でも問題なく資材に加工できるわけだが……俺の労働環
境はかなり悪いのではなかろうか？

しかし我慢だ、我慢するんだ。もうじき艦娘に会えるんだから。

「……フヒヒ」

「……」
「（）きげんだなごしゅじん。やつぱたたかいはちがたぎるよなー！」

「外務大臣は見る目がないのです。この顔はバナナが欲しいときの顔なのですよ」

「バナナはよろしいが、あらたなごしゅじんのぶきがひとつようでわ?
うつわをこわされではたまりませんでな」

「ふふふー、こんなこともあるうかと……ジャーンなのですう!」「
すげえかたそうだ。よかつたなあごしゅじん!」

「え……俺に?」

「もちろんなのです。遠慮なくお使いください」

渡されたのは鉄の棒だった。ぶつといヤツ。

「…………ありがとう」

「連装砲を解体して作った最高傑作です。頑丈さは保障するのですよ
!」

「そうですか。できれば解体前がよかつたです」

「ひでえやごしゅじん……おれたちのきもちをくんでくれよ!」

「サプライズまでえんしゅつしたというに、みそこないましたぞ!」「

「やかましいわバカチンドもが! 人をチンパン扱いしやがって……
文明をよこせッ!」

現実的に考えると、近代化改修つてエグイよな。

そんなどうでもいいことを考えながら、俺は西へと走り続けた。

センチメンタルなネ級♂

水平線をひたすら西へ。

俺がもし妖精さんと出会わなかつたら、どこにも行けずに死んでいただろうな。この変化のない景色を見てそう確信した。

この子たちのおかげで迷わず走れる。そこに一切の疑念が浮かばない自分自身に驚いていた。会つたばかりの相手を信じられるなんて、大人になつてからは一度もなかつたように思う。

これはやつぱり夢なんだろうか？

今は少しだけ、覚めてほしくない気持ちが芽生えていた。

疲れ知らずな体のおかげで、二日とかからず目的地に到着。これには妖精さんもビックリしたらしく、バナナを二本もくれた。

こいつら、いよいよもつてチンパン扱いも板についてきたようだ。

俺はワクワクしながら鎮守府の偵察へと向かい、絶句した。

玄関口となる港は体を成しておらず、面積の半数は瓦礫の山。

修復が間に合わないほどの襲撃に晒されたのか、もしくは直す余裕がないほど追い詰められているのか……いずれにせよ、実情は想像した以上に酷いようだ。

「ここが本当に君らのいた鎮守府なのか？」

「はい。我々がいたときよりもひどい状態ですが、間違いなくヨコスカとやらなのです」

「もうようせいのけはいもきはくになつてやがる。かんちすらできねえぞ」

「あのていどのほしゅうすらままならぬじょうきよう……」しゅじん、これはけいかくのへんこうもやむなしでわ？」

「そう、だな……まさかここまで——っ!?」

俺はこの目で見たものを信じたくなかった。

神通に肩を借りて、フラフラと歩いていく川内の姿。

二人とも中破、もしくは大破しており、あの破損した主砲は使い物にならないだろう。

その二人を提督と思わしき若い女性が出迎え、隣の響と時雨たんも疲弊しているのが遠くからでもわかる。

そして、あまりにも静かだつた……港にあるはずの喧騒はなく、ウミネコの鳴き声だけが寂しげに響いていた。

「リーダー、こいつをみてくれ。ていさつきがどちらにどうしようがおくれてきた。ちとめんどうなことになりそうだ」

「これは……あいかわらず間の悪い連中なのです。ご主人さま、少しお耳に入れたいことが」

「あ、ああ。どうした？」

「ここに深海棲艦の群れが接近しています。駆逐二十隻。軽巡八隻。雷巡二隻。重巡四隻。到着は約一時間後なのです」

「……その中で、エリートが何隻かわかるか？」

「エリート、せいえいのことですか。われらはぞんじませんが、しんかいせいかんにもゆうれつがそんざいすると？」

エリートの概念がない？ や、そう判断するには早計か。いつだって最悪を想定するのを忘れちゃいけない。

「この鎮守府にいる艦娘の情報が知りたい」

「申しわけありません……ここにも仲間がいたのですが、呼びかけに反応できないほど弱つているようなのです」

「おれたちがじかにしらべるしかねえか。まかせな」

「いや、俺も行く」

「!?」

艦娘の人数と状態を把握すれば、防衛できるかどうかわかる。最

悪、俺が背後から奇襲を仕掛けば勝率も上がるだろう。

……わかってる、言い訳だよ。俺はあの子たちを見捨てるのがイヤ

なだけだ。あれじやあどうみたつて戦えないもんなあ。

「すまないが、どうにか艦娘が勝てる方法を考えてほしい。もちろん無理なら諦める」

「くく。さてはごしゅじん、やるきだなあ？」

「かてるほうほうといわれましても、ごしゅじんがさんせんせんさるのであれば、かんがえるいみもありませんでな」

「め、名案を思いつきました！　こここの司令官と艦娘を縛り上げて庇護下に入れましよう。そしてどこかの島でバナナを与え、歯向かうことがないようにキチンと餌付けをするのです！」

「それは名案だな。だがバナナで釣れるようなアホなどいらんわ！バカなこと言つてないで潜入するぞ」

この時はまだ、焦りを隠せないリーダーの様子に気がつかなかつた。

敷地内への潜入は呆氣なく成功する。

まず人気のない建物から雨合羽を押借してかぶつてみたが、隠しきれない尻尾はどうしようもなかつた。開き直つて正面から侵入すると、誰も気にかける者がいないという現実に頭を抱える。

始めは資材の備蓄を調べようと工廠へ侵入、だが備蓄の姿はどこにもない。整備班が資材の確保に奔走し、明石が応急処置を施す程度が関の山であった。

鎮守府内の誰もが疲れ果てている。

これでは他者を思いやる余裕など持てるはずはなく、俺のような侵入者がいても気にならないわけだ。そしてなにより、ここに在籍している艦娘の数があまりにも少なすぎた。

工作艦の明石。駆逐艦の響。時雨。軽巡洋艦の川内、神通。軽空母の龍驤。戦艦の比叡。以上の七隻のみ。

資材は底を尽き、ボロボロで戦える艦娘はおらず、提督自らが港の

補修作業をしている。これが現在の横須賀鎮守府の全てだった。

「……俺はてつきり、艦娘なら妖精さんを認識できると思つていた」「（）には“ていとく”がおりませんでな。つながりがきれれば、にんしき)にもえいき)ようがでようものです」

「提督ねえ……俺にはあの子が立派な提督に見えるがな」「おれたちもそうおもつてるぜ？ なんたつてさいごの“ていとく”のいもうとだからな」

ピクリリーダーの肩が震えた。

さつきから妙だと思つたが、リーダーはあの女性提督になんらかの思い入れがあるようだな。

だからというわけじやないが、俺も興味が引かれた。

近づけばそばにいる響と時雨が気づくかもしない。けど、どうしても話を聞いてみたかった。

「提督殿、腕から血が出ているぞ。無理しすぎじやないか？」

「え？ ああこれはいいの。気にしないで」

「でもこのままじや、次の襲撃がきたら耐えきれないだろ。援軍は何をもたついているんだ」

「ふ、あはは！ 援軍なんてくるわけないでしょ？ ほとんど佐世保に持つてかれただから」

「……し、支援物資くらいはよこすよな？ さすがにこの要所を捨てたら、いよいよもつて終わりだぞ」

「はあ……もしかしてわざと言つてる？ あいつら、こつちに回す気なんてないわよ。お偉いさんはとつぐに逃げたあとだもの」

「…………なぜ、提督殿は逃げないんだ？ もう後がないだろうに」「私にもわからない。でも、この子たちを置いていくのは無理かなあ」

響と時雨が、そして俺の中の妖精たちが微笑んでいる。
なるほどね……ニヤニヤしている外務大臣を見てようやくわかつ

た。こいつら、俺をここに誘導してくれやがったな？ この健気な提督ちゃんや艦娘に会わせれば、俺が絆されると踏んだのだろう。

「なーんか様子が変だと思つたが、やつてくれたなアリーダー？」

「はう!? なななんのことですか!?」

「リーダーはあいかわらずはらげいがにがてですなあ」

「まあいいんじやねえの？ おれらのごしゅじんはこんなことでおこつたりしねえよ。なあ？」

ハハ、こやつめ。持ち上げつつ逃げ道を塞ぐとはやりおるわ。
いいだろう、乗つてやる。

そして大きなため息をついた瞬間、俺の後頭部に固いモノが押し付けられた。

「動かんほうがええで？ いくらアンタが姫級でも、比叡のゼロ距離
はアカンやろ」

「一歩でも動いたら、撃ちます！」

無理だぜ？ だつて弾がねえからな！

そう言つてケラケラと笑う外務大臣を見たとき、俺の中でサイコ疑惑が急浮上していた。

バナナを失つたネ級♂

「動いたらダメですよ？ 動いたら気合入れてドンしますから!!」「うるさいねん！ 耳元で大声出すなや！」

「す、すみません」

「龍驤か。さすが歴戦の猛者、肝が据わっているな」

「なんや、ウチえらい評価されとるやん。ちょっとうれしいわ」

龍驤が俺の前に立ちふさがり、雨合羽を取り払つた。

これが息を飲む瞬間というもののなのだろうか？ 俺の姿があらわになると、艦娘たちの間に怯えが走つたのを感じる。

「……深海棲姫」

「また新種かいな？ もうええてホンマにもう！」

「待つた、姫じゃない。俺はただの深海棲艦で男の人格だ。間違えないように」

「ただの深海棲艦が言葉を理解する？ ありえない」

「こうして目の前にいてもか響？」

「!？」

「リサーチ済みかいな。熱心やなあ自分」

「命がかかっているからな。資材が足りなくて、比叡の弾薬がないことも知つてるぞ」

「ひえ！ あ、あります!! 弹薬はあります!!」

「つ……うるつさいゆうとるやろ！ 黙つとき！」

「す、すみません」

比叡かわいい！

必死に誤魔化そうとして、さらに墓穴を掘つてるのがかわいい。

でも龍驤がフオローしきれないのを外務大臣が爆笑してる……人間としてこうなつてはいけない、そう深く心に刻んでおこう。

だがそろそろ時間がない。

この提督が愛されているのは十分に伝わってきた。だからこそ、なんところで死なせるわけにはいかないんだ。

「安心しろチビッ子。別に戦いにきたわけじやない」

「誰がチビッ子じやコラ！ 冷やかしやつたら帰れボケ」

「折り入つて提督殿に提案がある。ここから逃げる気はないか？」

「え？」

「このまま鎮守府にいても全員死ぬ。提督殿はこれを否定できるか

？」

「…………」

もし俺が彼女の立場だつたら逃げだしてると思う。無力感に悩んで、飯もろくに食えない毎日ならきつと逃げ出す。

「この世にはとんでもなく強い深海棲艦が山ほどいる。ここにいても味方の支援はおろか、資材さえ苦しい毎日が続くだろう」「…………もうやめてや。それ以上は」

「今は黙つて聞こう」

「…………」

時雨が龍驤を抑えた。彼女もまた提督を大切に思い、逃げ道を塞ぎたくないのかも知れない。

「もう十分だ、これ以上苦しむ必要はない。だから鎮守府の艦娘たちと一緒に逃げるというのはどうだ？ 俺も可能な限り協力しよう」

「…………この子たちの姉妹艦が遠くで戦つてる。私たちの後ろにはたくさんの中の子供たちがいる。それに、誰にも家族を失つた私と同じ目に合わせたくない。だから、ごめんなさい」

即答か……。

肩に乗っている妖精三人と無言で見つめあう。頑張つたけど逃げてもらうこととはできないようだ。そして艦娘たちも戦えるようなコングディションではない。

やつぱり俺が頑張るしかないか。

「あ～ゴホンゴホン！　これは独り言だ」

「な、なんやねんいきなり……」

「長旅で体が疲れたなあ。ん？　妙に重いと思つたら、荷物がいっぱいだったようだ。よし、ここに捨てていこう」

「あ、あの～いつたい何を――!?」

――さ、猿芝居にもほどがあるので……。

――やかましい！　さっさと資材を置いてけ。

――ごしゅじん、どれくらいすてていきますかな？

――全部だ全部、もういくとここまでいつちまえ。ついでに妖精仲間を助けてここをなんとかしろ。今すぐにだ！

――くくく、さすがごしゅじんだ。むちやいってくれるよなあ。

黙れ腹黒妖精。俺をここまで利用しやがったんだ、しつかりと艦娘たちを守つてもらうからな！

全部の資材を港に並べたら結構な量になっていた。俺には燃料、鉄、アルミニウムといつたわかりやすいのしか判別できないが、これだけあれば艦娘全員の補修と補給は問題なく行えるはずだ。

「スッキリした。さて行くか

「…………なんでや」

龍驤が引き留めるように俺の手を握る。振り返ると、彼女はこぼれそうなほど目尻に涙を浮かべていた。

「…………どうして……助けて、くれるん？」

その震えた声で、絞り出した言葉の重みが違つた。

彼女たちは味方のいない四面楚歌の中で戦い続けたのだろう。それが痛いほど伝わり、ろくに知りもしない俺でさえ憤りを感じたぐらいだ。

このままでは龍驤を抱きしめ、もらい泣きをしてしまう。

俺は深海棲艦だ。彼女たちに味方だと勘違いさせてはならない。これから彼女たちの生活が軌道に乗つたとして、また上の連中が戻つてこないとも限らない。その時に俺の存在が足枷になつたらどうする？ それこそ死ぬほど後悔することになるんだ。

「歴戦の猛者がそんな顔したらみんなが不安になる。それになんのことか俺にはさっぱりわからないな。誰かがあのいらない荷物を処分してくれることを願うよ」

「…………ひぐ…………うん」

もう振り返らない。

提督ちゃんと艦娘たち、そして時雨たんのため、オジサンも頑張るか。

翌朝、横須賀鎮守府は大変な騒ぎになつていた。

大量の資材だけではなく、食料品までが届いていたからだ。中身は全部バナナであつたが、食料の供給も不足していたこの地では神の恵みに等しい。

問題は日持ちがしないことである。それでも、たっぷりと味わえる果実に誰もが舌鼓を打つていた。

「深海棲姫が助けてくれたあ!? ウソでしょ?」

「嘘じゃない。本当」

「で、でもどうしてでしょうか?」

執務室では修理を終えた川内と神通が不可解な出来事に納得がない様子であった。

泣きながら修理をさせろと駆け寄ってきた明石から資材の到着を知り、こうして提督の元へとやってきたのだ。

「それは……わからないよ。でも私たちにここから逃げろと言つてくれたの」

「僕らは気づかなかつたけど、あのとき深海棲艦がすぐそこまできていたんだ。でも……」

「壊滅。港に流れ着いた残骸を調べたら戦闘の跡が残つていた」「……資材を分け与えてくれて、深海棲艦まで撃退してくれた?」

「神様でしようか?」

誰も否定しない。だが理由どころか何者かもわからない。

素直に喜べばいいのか、自分たちの無力を悔めばいいのか、彼女らにとつては複雑な気持ちであった。

「……あのさ。もう一つ気になるんだけど、比叡はなんで落ち込んでるの?」

「ああ、こいつその大恩人の後頭部に主砲押し付けて脅したんよ。アホやでホンマ」

「やれつて言つたの龍驤さんじやないですか!? ひどいですう!」「冗談や冗談、堪忍やで。でも、いつかぜつたい恩返ししたるわ」

目を赤くした龍驤の決意に笑顔がこぼれる。

この横須賀鎮守府に、昨日まで失われていた何かが戻りつつあった。

そして彼女たちは知らない。

そう遠くない無人島で、全員の名前入り専用装備をシコシコ作つて
いる大恩人（過保護オジサン）がいることを。

積載量に定評のあるネ級♂

鉄の棒がダメになつた……けどそれは別にどうでもいい。

今こそどうやつて銃器を作らせる方向へ仕向けるかを考えるのだ。

横須賀でカツコつけたあの日、俺は深海棲艦の群れを背後から奇襲した。理由は重巡洋艦の二隻が後方を陣取つていたためだ。

重巡リ級。それなりに高い火力を持ち、夜戦においては厄介な存在。俺の装甲を抜いてくる可能性が高く、とても油断できる相手ではなかつた。

だが問題は強さだけではなく、人間とそう変わらない容姿が俺を悩ませた。でもやらなければ提督ちゃんと艦娘たちが死ぬ……その恐怖が俺に勇気を与えたんだ。

背後から重巡二隻をまとめて粉碎、そして鉄の棒も粉碎。その後は殴る蹴るの暴行によつてなんとか勝利を認められた。

でも残骸を回収するとき、体を碎かれたり級が足元から俺を見上げていたんだ。そのオーシャンブルーの瞳は憎しみに染まり、死してなお忘れぬと言われたようでゾクリとした。

そこに開発班の妖精がトコトコと近づく。

——そざいはつけん。

おもむろにスプーンをリ級の目玉にぶち込みやがつたから、ひ!?
と少女のような声を出した俺を不思議そうに見ていた。そのままブチリと躊躇なく引きちぎり、手にした“素材”を高らかに掲げ、俺に自慢してくる。

——せんどがごいすー。

記憶に残る龍驤たんのぬくもりだけが、俺の心を強く支えた。

強くなろう……いや、なつてみせる。だからちゃんとした武器をください。

「大砲をください」

「また武器を壊したのですか？ まつたくもー」

「（ご）しゅじんはものものがわるいですなあ」

我慢、我慢しろ……」で怒つたらいつも通り鈍器を渡されるだけだ。いいかげんいいよな？ 僕が大砲をぶつ放しても。さつさと役に立たない尻尾の主砲を交換して、華麗なる回避からの砲撃を打ち込むんだ。

そして艦娘たちのピンチを助け、朝は訓練、夜はニヤンニヤン。なんつって、ぐへへ。

「ごめんなさい。大砲がほしいです。あとバナナも」

「めつ！ なのです。我々にはそんな余裕はないのです」

「ききわけのないこはこまりますぞ？」

「スヽ……んんッ！！ ううう……」

「お、おい……」しゅじんがそこそこキレイてるぞ！」

当たり前だチビ助どもが!!

このよくわからん無人島に住んでから少し経つが、なんでお前らの生活レベルだけがアップしてるんですかねえ？

ここにバナナの木を植えてくれたのは感謝してる。でも俺のベッドなんてワラを敷き詰めただけで、むしろこのワラをどこで手に入れたのかが気になつて夜も眠れないんだぞ。俺にもその楽しそうなハンモックをくれ。

「冗談抜きで、大砲なしではこの先生きのこれないぞ？ 今までによわつちい深海棲艦しか遭遇してないから、危機感が足りてないんだお前たちは……俺だつてしつこく言いたかない、でも鈍器では限界がある」

「そのことですば、じつはおつたえにくいくことが……」

「な、なによ……怖いんだけど」

「まえにさ、おれたちにも『しゅじんのことわからねえつていつたろ？ あれほんとうなんだ』

「体の構造が複雑すぎてどうにもならないのです。艦娘は意識するだ

けで銃器のトリガーを引けますが、ご主人さまにその機能はありません。新たに構築したくてもできないのです。その尻尾のように」

なんだと……じゃあこれからも鈍器で戦わなくてはならないのか？ その理論だと艦娘のほうが複雑だと思いますけど。

ちなみに尻尾の根元が倉庫になつていて、荷物はここにまとめてある。妖精たちから積載量が凄いと評判もいい。

「ごしゅ、できた」

「お、見せてくれ」

「あい」

「素晴らしいな……名前はあるのか？」

「ようせいもにたあ」

開発班に頼んでいた例のブツ、妖精モニターが完成したようだ。

偵察機からの映像をリアルタイムに映し出す、謎すぎる妖精テクノロジーの結晶。電波を使わずにどうやって映しているのかは不明であり、有効範囲は俺の存在を感じできるところまで、だそうだ。さっぱりわからん。

「見ろ、艦娘が訓練しているぞう！」

「そんなの当たり前です！ ご主人さまはいつも艦娘艦娘って、我々にもさらなる愛情を注ぐべきなのですよ！」

「つったサカナにも、エサはひとつようだぜ？」

「お前らが俺を釣つたんだろうが」

「ごしゅがわるい」

「…………」

く、なんだこの敗北感は。ちっこい子供に責められたような、反論できるけどできないようなこの感覚……。

「それより『しゅじん』。そろそろしづいがあふれてしまいそうですが、どうされますかな？」

「ええか……ここで野ざらしにはできないよな？」

「……はうみのどまんなかだぜ？ さびないようソウコをつくつてもいいが、いかんせんかせがつよすぎる」

「俺はその環境で寝てるんだがな。でもどうしようか」

「あの『主人さま』？ その、どうせなら、寄付するのも手かと」

「んん？ どこに寄付するんだあい？ オジサンにちやあんと教えてほしいな」

「……『しゅじん』

その日はなんだ班長？ 僕はただリーダーの献策を聞いてあげてるだけじゃないか。邪魔するならお前のほっぺをプニプニするぞ。

「さあ、怒らないから言つて『らん』？」

「……ヨ、ヨコスカとやらに、です」

「そうかそうか！ リーダーたつてのお願いなら聞かざるをえないなあ！ よおしチビども、三十秒で支度しな」

「「「らじや！」」

「お『づ』ああッ！」

口は一人ずつ!! いい加減に順番を守れチビども!

何回言えればわかるんだこいつらは……。

おつと、急ピッチで作つてもらつた艦娘たちの専用装備を忘れないようにしないと。喜んでくれるかなあ？ フヒヒ！

ニヤついている俺を見上げ、妖精三人娘が頬を膨らませていた。やんちゃな子供みたいで生意気だが、近頃は無性にかわいく感じてしまうことが多い。いつものハンモックに乗せると笑顔が戻り、俺はこんな生活も悪くないと感じている。

できれば、ハンモックは乳首から外してほしい。

そう思いながら横須賀鎮守府へと走りだした。

馬並みのネ級♂

俺は横須賀鎮守府へと舞い戻り、妖精から町の住民が避難していくないと聞いて耳を疑つた。

そんなことがありえるか？ 鎮守府内の作業員が少ないのは、提督ちゃんから聞いた話で多少は理解できる。一部がお偉いさんと逃亡し、艦娘たちを捨て石にした……そこまではわからんでもない。ならどうして周辺の町に住民が残っているのだろうか？

防衛を捨てたも当然なのに、一番守るべき住民を放置するのは明らかにおかしい。保身に熱心なお偉いさんであればなおさらだ。

いくらなんでも異常すぎる。上が腐りきつているだけならまだいいが、これは指揮系統そのものが崩壊しているのではないか？ それならこの惨状も納得……できねえよ。

ダメだわからん。計画を変更して情報を集めたほうがよさそうだ。

「そういうえば、鎮守府の妖精たちは大丈夫か？」

「ごあんしんを。」しゅじんのパワーでかんぜんふつかつしましたぞ」

「でもいぜんよりかんしようできないから、おもうようにサポートできなつてさ。まあそうだよな」

「……鎮守府の妖精さんが装備を開発したり、提督ちゃんを助けてやればいいじゃないか」

「できません」

「あんだと!? できなくともやれ！」

「こ、ここの仲間たちもご主人さまを宿主として復活しました。そして艦娘はご主人さまとの絆がありません。なので装備に加護を与えることはできないのです」

「おれたちようせいをにんしきできるだけです」「いんだぜ？」かいわもできるなんてさせきみたいなもんさ」

「……前に歴史上でも二人目とか言つてたな」

「さよう」

「何が左様だ。そのセリフをもう一度吐いたらムレムレの脇に挟むぞ」

「こここの妖精さんは復活しても、思うように力を発揮できないのか……俺はちょっと甘く考えすぎていた。じゃあ作つてもらつたこの専用装備も、スペック以下の性能しか発揮できないのかな。

「資材を送り込んだら帰るつもりだが、予定を変更して情報収集を行う。そこで、俺の変装道具を用意してもらえないか？ 尻尾も隠せるやつがいいんだが」

「ご主人さま、なぜこそこそするのですか？」

「ごしゅじんはじしんをおもちくだされ！ きつとかんむすたちもかんげいしてくれますぞ？」

「深海棲艦を歓迎してもらつては困るんだよ。それにあんなカツコつけて出ていったのに、一週間足らずで戻るのは恥ずかしい……」

「なんだよそれ……じゃあどうすんだ？」

「俺にいい考えがある。まあ聞いてくれ——」

いくら何でもこつそり資材を置いていくわけにはいかないだろ。だから今回は猿芝居抜きで渡す方法を考えてあるんだ。

一つは輸送トラックを利用すること。

この鎮守府は資材の出入りはないが、さすがに食料品の輸送くらいは行われているはず。ちゃんと妖精さんにも調べてもらうつもりだし、まあ間違いない運んでいるだろう。

トラックの運ちゃんには袖の下を渡し、荷物として資材を運んでもらう。まあこんな状況だ、きっと運ちゃんも空気を読んでくれるさ。資材は重いが小分けにすれば問題ない。運転手は筋骨隆々なゴリラが多いし、フォークリフトでも使えば大丈夫だろう。

「——てな感じ。提督ちゃんには一筆添えればよからうなのだ

「おお、それなりに計画つぽいのです！」

「みなおしましたぞ！ ゴリラのはつそそうとはおもえませぬ」

「べつにだまつておいてけばいいじやねえか」

「聞いたカリーダー、班長。大臣には計画を立てて実行する喜びがわからないらしい」

「外務大臣はリアリストなので、ロマンを理解するのは不可能なのです」

「……おろかな」

「な、なんでだよ？ めんどうじやんか！」

「資材が勝手に増えたり、支援がきたと勘違いさせたらどうする？ ぬか喜びなんてさせちゃダメなの。大臣は罰として俺の変装道具を作ってくれ」

「…………わかつたよ！」

黙つて置いてつてもいいが、ああいうのは管理者も報告が大変なのよ。報告書に、なんか増えてました！ とは書けないから。

だけど、せつかく艦娘を眺められるチャンスだつたのになあ……。まあここまで狂つた環境は放置できない。俺がいれば妖精の力で横須賀は持つとしても、他の鎮守府は戦力外と見たほうが賢明だ。だから可能な限り情報を集めよう。

後手に回つて、彼女たちを失う前に。

「ゞしうじん、できたぜ！」

「……早すぎだろ。また雨合羽だけつてオチじゃないだろうな？」

「へへ、まあそうちやくしてからのおたのしみだ。さぎょうにかかる」「「わー」「

数分後、俺はケンタウロスになつていた。

「なあ、どういうことだ？」

「ケンタウロスだな」

「見りやわかる。なんでケンタウロスにした？俺は町で情報を集めると口を酸っぱくして言つたよな？もう一度言う、なんでケンタウロスにした？」

「むむ、まちでじょうほうをあつめるからでしょう。たしかにめだたず、しつぽもみえませぬ」

「ほう、ケンタウロスが目立たないと」

「田舎ではしょつちゅう見ます。リンゴが主食なのです」

「ケンタウロスの食性なんてどうでもよいわ！」

「だ、だめだつたか？ごめんなさい……」

「……あ、いや。いやいや言い過ぎた。冗談だつて！ そういうや俺の田舎にもいたわケンタウロス。よく後頭部を射られたなあ」

「ビックリしましたぞ？ なぜおいかりなのかと」

「そ、そつか。ちょっとビビつたぜ！」

んくケンタウロスいたかなあ？ てつきりファンタジー世界の馬
だと思つ——ここ、ファンタジーだつたわ！

「よし、準備はいいな？ まずみんなには鎮守府を出入りする輸送車、
またはトラックを見つけてほしい。そして上層部に近しい人、内部事
情に詳しい人もだ」

「「らじや！」」

「もちろん艦娘や提督ちゃんは除外する。彼女たちとの接触を見ら
れ、面倒になる可能性を排除するためだ。では散開！」

「「「わー！」」

気が重い。あの子になんと伝えればよいのか……。

横須賀に支援はない。どんなに手を尽くすとも、この流れは止め

られなんだ。

全てはあの日、橘君を失つた瞬間から決まつっていたのだろう。

皮肉なものだ。わしが守ろうと誓つた橘君の妹に守られているのだから……情けない……どこまでも情けない。それも居酒屋で酒に呑まれ、彼女に会うことからも逃げていてるなど……うう。

「……すまぬが、もう一杯頼めるかの」

「横から失礼、それくらいにしたほうがいいぞ爺さん」

「ほほ、心配していただ——」

……ケ、ケンタウロス？ 居酒屋にケンタウロスじゃと！？

なんと幻想的で美しいことか。

「マスター、いつもの」

「ウチにや馬の常連はいないよ」

これがわしと、白きケンタウロスの出会いじやつた。

孔明になりたかつたネ級♂

ケンタウロスが隣に座ろうとしているが、カウンター席という構造の問題で苦戦しておつた。その長い体では椅子に座るのも一苦労じやの。

一生懸命ガタガタと頑張つ——あ、コップ落とした。

「す、すまん。都会は慣れてないんだ」

「そういう問題かい？　あんた、私生活大変そうだね」

「そうでもない。走行時の安定感が違う」

「まさかこんなところでケンタウロスに出会うとは。これも何かの縁、彼女にも一杯頼むよ」

「女ではなく男だ。ケンタウロスの雌雄を間違うと股裂きの刑にされるぞ。俺は過去に三人ほど裂いてやった」

「そ、そうじゃったか。これからは気をつけるとも」

ケンタウロスの世界はなんと厳しいことか……どう見ても顔は男に見えんがの。

「ところで、爺さんは海軍の将校だそうだな。こここの提督殿とも親しいと聞いている。差し支えなければ、こここの住民が避難していくない理由を答えてほしい」

「君は……ふむ、そうじやな。わしの力不足が原因じやよ」

「別に爺さんを責めてるわけじゃないんだ。鎮守府での評判も悪くなかったからな。聞きたいのは、誰がこの状況を生み出したのかだ」

「……全員、じやろうな。元帥が倒れ、派閥争いに火がつきおつた。見通しが甘かつたと気づいた時にはもう部下を失つておつたわ。西側に嵌められての」

「西？　やはり佐世保に戦力が集中しているのは、指揮系統の混乱が原因だつたのか」

「うむ。橘君……横須賀提督の姉君を死に追いやつたのも、彼女をここまで苦しめたのも全て……全て奴のツ！ ゴッホ!!」

「お、落ち着け爺さん」

「ふう、すまんのケンタウロス君。わしは佐々木という、そちらの名前を聞いても？」

「……ケ、ケンタツキー」

「ケンタツキー君か、よろしく頼むよ。実は——」

「佐々木中将、探したよ」

「!?」

その声は、時雨か。

情けない姿を見せたくないはずが、もつと情けない姿を晒してしもうたか。支援を心待ちにしていた彼らに、どんな顔を見せろというんじや……。

おそるおそる振り返ると、時雨がケンタツキー君を捕獲しておつた。

「久しぶりだね中将。お酒は控えてつて言つたはずだよ」

「ほ……そうじやつたなあ。すまんの」

「提督や僕らも心配してたんだ。さあ早く鎮守府に行くよ？ もちろん君もね」

「……じ、実はお腹が——」

「空いてるんだよね？ わかつてる」

柔らかい物腰は変わらんのう時雨は。相手を落ち着かせる独特的の空気は彼女しか出せまい。

しかし驚いた。あの時雨がここまで親しげに話すとは……やはりケンタツキー君は橘君の知り合いで間違いないの。

「ちと道草を食いすぎたか——おつと」

「飲みすぎだよ……あの、よかつたら君にお願いがあるんだけど、いい

かな？」

「……背中は定員一名だ」

「ふふ！ ありがとう。足が増えた理由は後で聞かせて」

笑顔……!? おお、時雨が笑つておる！

すっかり忘れていた。わしが本当に求めていたのは支援物資などではない、彼女らの笑顔だつたではないか。いつから忘れておつたのか……今ではもう思い出せなんだ。

ケンタッキー君の背に乗せられ、こうして後ろから様子を見るだけでも嬉しくなる。まるで逃がさないとばかりに、彼の腕をしつかり掴む時雨のしぐさ。これほどの無防備を晒す彼女を見れたのは僥倖であつた。

居酒屋から揺られること数分。もう 庁舎の入り口が見えてきたようだ。正門には久しい響の姿もある。

「時雨。中将は……え？」

「見つかつたよ。ほら、彼の背中に乗つてる」

「佐々木中将。無事でなにより」

「響、遅くなつてすまんの……」

「問題ない。中で提督も待つてる。それと……あなたはなぜ馬なの？」

「悪いが、哲学は専門外なんだ」

「……詳しいことは中で聞く。入つて」

響がギシツとケンタッキー君の腕を掴み、獲物を見るような目で彼を見つめていた。

なんと彼女まで？ この執着心……いつたいこの地で何が起きているのやら。

わしも彼に興味が湧いた。彼女らの笑顔が彼に関係しているのは間違いない。わしに足りなかつたモノがここにある。

この年になつても、学ぶ喜びというものは変わらんものじやな。

応接間へ案内されると、橘君がわしを歓迎してくれた。ケンタッキー君を見て驚き、わしを見てホツとしたように笑みを浮かべる。

姉君とはまた違う、立派な提督になつたの。

「中将！ よかつた……無茶ばかりして、本当に心配したんですから」「橘君。本当にすまなんだ」

「もう……そうやつて簡単に頭を下げるのはやめてください！」

「君はたくましくなつた。今やお姉さんにだつて負けないとも。本部からの支援もなしに、この地獄を耐え続けているのだから」

「最初からあんな奴らの支援なんて当てにしていません。もちろん無謀なこともわかつてしまましたが、支えてくれた人もたくさんいますから……そうでしょ？ お馬さん」

「…………」

まぶしい。やはり彼女こそ最後の希望。

西の者どもは、深海棲艦がどれほどの脅威であるかをまるでわかつておらん。

佐世保では空母型の深海棲艦まで現れたといふに、要所である横須賀を切り捨てるなど考えられぬ愚物よ。

今は戦力があちらに集中しているからよいものの、ここの制空権を奪われれば自分たちも終わりだとなぜ気づかん？ それを龍驤君ただ一人に押し付けるなどと……ぬううああああ！！ 絶対に許さんツ

!!

「ゴッホ!!」

「中将！」

「だ、大丈夫じゃ……う、うう……」

「……泣かないで。あの日、私たちをただ一人守つてくれた中将にみんな感謝しています。お姉ちゃんを殺して、艦娘を物扱いする奴らの支援がなくても、私たちは負けませんから」

「橘君……うう……」

「ウチや、入るで？ 問題発生や提督。工廠で……中将やん、久しぶり
！ 泣き虫なんはかわらんなあ」

「ミ、こら失礼でしょ！ そんなに慌ててどうしたの？」

「聞いてや……いつも食料品運んでくる運ちゃんがな？ 足回りを弁
償しろ、ケンタウロスを出せや言うてうるさいんよ。意味わからん
わ」

「ケンタウロス？ ああ、このお馬さんのことでしょ」

「は？ あ……あああ!! ホンマにケンタウロスおるやん！ 自分
なにしどん!!」

龍驤君は賑やかで場を明るくしてくれる。

あの撤退戦で艦娘たちを守り抜き、本来なら彼女はこの上ない名誉
を賜るはずだつた……だが、待っていたのは敵前逃亡を図った軍規違
反艦の烙印。それも、彼女が主導であつたと全ての責任を押し付けた
のだ。

奴らは恐れた。龍驤君のカリスマに。

深海棲姫討伐戦の最中、誰よりも早く後方艦隊の動きに疑問を持つ
たのが龍驤君だ。結果的に彼女らを率いていた橘君の艦隊は包囲さ
れ、味方の援護もなく殲滅された。

今思い出しても腸が煮えくり返る！

即座に後方への一点突破を選択した龍驤君のおかげで、多くの艦娘
たちが救われた。だが橘君は……。

橘君。見えるかね？

妹君が、龍驤君が、時雨が、響が笑つておるのだ。きっと川内と神
通、そして比叡もそうなのだろう。明石もそうであると……いやい
や、忙しさでそれどころではないかの。ほほ。

自分の情けなさには怒りを通り越して呆れがくるわ……。

さあ前を向け佐々木中将。胸を張つてやれることを精いっぱいや
るのだ！

「橘君。いつも通り食料品とわずかな資材しか用意できず、本当にす

まない。なにやらその輸送中に問題があつたようだが、ケンタッキー君は悪くなからう。弁償に関してはわしが話を聞くとも

「中将はいつもそうなんだから……どれだけ私たちが——」

「提督殿、話の途中で失礼。中将殿にご報告が」

「……居酒屋では中将のこと爺さんって呼んでたよね?」

「なんや自分、中将と知り合いなん?」

「ゴホン、まあな。輸送品に関してですが、おそらく中将殿が持つてきた資材が重すぎて車両が耐えきれなかつたのでしよう」

な、何を言い出すのだケンタッキー君。わしが集められた資材などたかが知れておる。とても過積載になるほどでは……。

「待ちたまえケンタッキー君。そんなはずは——」

「龍驤、その運転手が持つてきた荷物の名義は確認したか?」

「そんなん中将以外にあるわけないやん。せやけど、確かに資材がいっぴいや文句言うてたで」

「なんと!」

「だそうです。これから俺は中将殿から受けた依頼を完遂するため、運転手と話をつけてきます。失礼」

「ケンタッキー君……そつか、君だつたのか」

「ここに戻るまで、もう町がないのではと恐怖していた。状況を考えれば当たり前で、守り切れるわけがないのだ。たとえ、どんなに優れた提督であろうとも。

ケンタッキー君。君は彼女たちを救い、きっと心まで守ってくれたのだな。わしの立場と心を守ろうとしてくれたように……。

「ほなな！ つて逃がすわけないやろ！」

「時雨」

「大丈夫だよ。門は閉めたから」

「二人で彼を絶対に捕まえてちようだい。きっと涙に弱いと思うか

ら、泣き落としてでも引き止めて
「まかしどき！」

なるほどの……前回は逃げられたんじやな？ ほほ、楽しいわい。
助けるだけ助けておいて、礼も言わせてもらえんのでは困るのじや
よ。

だがの、あの手のタイプは泣き落としが効かんでなあ。

じやがケンタッキー君の人柄……馬柄？ ほほんの少しわかつた。
橋君のために、ここはわしが頑張らねばなるまい。

酸っぱいネ級♂

ぬう……やつぱり計画通りにはいかなかつたか。

だけどあの爺さんを放つておくと自害しそうだし、このまま臨機応変に動くしか手はなさそうだ。

妖精情報によれば、爺さんこと佐々木中将は艦娘たちの恩人らしい。艦娘をかばつて横須賀に左遷？ された提督ちやんのため、あつちこつちへ駆けずり回つて食料品や資材を工面していた。たとえそれが満足できる量ではないとしても、その努力を無駄にはさせない。爺さんは艦娘を想う心の友だつたんだ。またもや資材確保の旅に出てぽつくり逝かれたら困る。

あんたの墓場はここだ。艦娘を見守りながら幸せに長生きしろ。

「なあなあ、ちゃんと聞いとる？」

「も、もちろん聞いてる。でも俺は上京したてのケンタウロスだから、君らの知り合いじゃないんだよなあ」

「川内と神通が会いたがつていてるから、終わつたら顔を見せてあげてね。明石は仕事を増やした戦犯だつて嬉しそうに怒つていたけど」「せや、ごはんもみんなで食べよか。提督たちの予定はどうなん？」
「大丈夫、響が考えてくれてるから」

「ええやん！ アンタはなにが好き？ ウチの一押しはカレーや」

時雨と龍驤が可愛すぎて辛い……。

彼女たちのエピソードを知れば知るほどかわいそうで……いつそ玉碎してでも原因を潰してやりたいが、俺の死は妖精の死と同義だ。後継者を見つけるまでは絶対に死ねない。つてか死にたくない。

得られた情報のほとんどは胸糞悪いものばかりで、俺の予想通り軍の指揮系統は滅茶苦茶だつた。しかも提督ちやんの監視役はすでに逃亡し、本部にある防衛司令部でふんぞり返つているらしい。これらは全て妖精からもたらされた情報なので間違いない。

そして理解する。広く早く、あらゆる情報を得てしまう妖精を敵に回す恐ろしさを。

いざれ奴らは横須賀が落ちないことに疑問を持つだろう。だが鎮守府周辺はこちらのテリトリーとなつた以上、どこからネズミが入ろうと問題なく対処が可能だ。

「カレーか……いいなあ。でも俺は毛繕いで忙し——」

「毛繕いなら僕らがしてあげる。寝室は足を外せば大丈夫だよね？」

「ケンタウロスに足を外せと申すか……それよりこの縄を外してくれ

「もつと太いのがええの？」

「太さに不満は言つてない。むしろ太すぎるから不満だと言つてる。しかもこれ曳航用のロープだろ？ 逃げないから外せつての」

「まずは積み荷の確認だね。ついでに明石と顔合わせして、倉庫整理に付き合つてもらつていいかな？」

「聞けや。淡々とスケジュールを組む前に相談しよう、な？」

人の話を聞きやしねえ、スルーアガ高すぎて笑うしかないわ。

時雨は俺の腰に巻いた曳航用ロープを持つて隣を歩き、龍驤が背中に乗つてキヤツキヤと乗馬を楽しんでいる。天国かな？

……もうこうなつたら、提督ちゃんに相談して工廠の地下に隠し倉庫でも作つてしまふか？ 有事の際も、それがあると無いでは安心感も違うだろう。

「見てみ、比叡とウチで車を倉庫まで運んだ跡や」

「ここで壊れたつてこと？」

「せや。いつもここで止まつて受付に伝票出すやんか？ そしたら三台ともタイヤがへし折れて大騒ぎや。意味わからんやろ？」

龍驤の言つたとおり、工廠の入り口から倉庫まで輸送車を引きずつた跡が残っていた。俺が重量を考慮しなかつたせいでこんなことに

……。

輸送車に積んだ資材は、妖精さんが加工した特殊な形をしているんだ。鉄などはコンパクトに圧縮され、見た目は小さくても重量はそのまま。だからたくさん積めても重量はえらいことになるわけだ。

あの時は食事中の運転手をとつ捕まえて急いで積み込んだからなあ……いや、申しわけないことをした。でも反省はしない。

そんなことを考えたせいで罰が当たつた。港で黄昏ていた運転手が俺を見つけ、鬼の形相で駆けつけてくる。

「あ、この馬女！ どんだけ積み込みやがったんだテメエ！ あれは佐々木中将にあずかった大事な車両なんだぞ？ どうしてくれんだけ……仕事が……俺たちの仕事があ！」

「す、すまん。だが安心してほしい、俺が責任を持つてちゃんと修理するから」

「本当か？ 本当だな？」

「ケンタウロスに二言はない。本当にすまなかつたと思つている。だが一つだけ言わせてもらうが、俺は馬男だ。次も間違えたらお前の頭をお前のケツにぶち込んでやる。わかつたか小僧っ!!」

「ハヒッ!?」

倉庫内は作業員が忙しなく動き回つており、妖精さん特製の資材を運ぶのは大変そうだった。特に比叡は疲れ果てていたが、見かねた時雨たちも参戦したから問題はないだろう。

しかし妙だな……俺の妖精たちはどこへ行つた？ さすがに大丈夫だとは思うが、こうも遅いと少しだけ心配になるぞ。

「ケンタウロス君」

「なんだ爺さ——佐々木中将もこちらに？」

「ほほ、気軽に爺さんと呼んでもらおうかの。孫ができたようで嬉しいかつたのじやよ」

なんとも穏やかな爺さんだ。作業員たちもあいさつにやつてきて、いつもありがとうございますとお礼を言っていた。

人柄だけじゃない、爺さんなら必ずなんとかしてくれるという信頼があるんだろう。本当に味方のいない状況でよくやってきたな。

「のうケンタツキー君。 そう急がんでもよいのではないか?」

「なにがです?」

「今夜出るつもりじやろ? みなまで言わざともわかるよ」

「…………」

「君がなぜ彼女らを守ろうとしているのかは問わん。だが君におんぶにだっこではわしらの気が済まんでな……ところで、佐世保に新たな深海棲艦が現れたことを知っているかね? 空母型だそうじや」

「ヲ級が!?

「ふむ。その様子では深海棲艦の一部がこちらへ向かつておることも知つておつたようだの」

え……知らないです。

「わかつておる、君が一人で立ち向かおうとしておることを。君から見れば龍驤君たちでさえ赤子当然。まだまだ未熟に見えておいるのも十分承知しておる」

までまで、何を言つてんだよこの爺さん……人をアフロ入りのガンダムと間違えてないか? それにあの子たちは艦装さえまともなら、俺をワンパンで沈めるポテンシャル持つてんのに。

ああ伝えたい……俺のメインウェポンが鈍器であることを。

「わしはもう長くないじやろう……だからどうか、どうかここに留まり彼女らを導いてほしいのだ。大海の支配者たる、深海姫よ」

「な!? お、おい爺さん冗談だろ? まだ元気そうじゃないか……」

「ほほ、こればかりはどうにもならんでなあ。だからこそわかるのだ

よ。君になら、彼女たちを任せられると

「…………爺さん。命をダシにするのは卑怯すぎないか？」

「ほつほ！ 死にぞこないの特権じやな」

やめてくれよオイ……妖精たちはそんなこと言つてなかつたのに。

深海棲艦の一部がこちらに向かつて、そのタイミングで爺さんが逝つたら艦娘のモチベがダダ下がりだぞ？ 詳しい数はわからないが、俺一人で対処できるほど甘くはないだろうし……まいつたな。

「爺さん、生きろ。せめて情勢が安定するまで生き続けろ」

「ほつほほ！ 無茶言うわい。それが君の望みなら頑張つてみようかの。では、契約を延長してもらえるかな？」

「あれは適当に言つただけなんだが…………わかつた。期間は爺さんが死ぬまでだ。俺もやれるだけやつてみるが、艦娘を守りたければ爺さんが死ぬ氣で生きろ。あんたの存在も彼女たちの支えなんだ」

「ほほほ、楽しいのう」

何を喜んでんだこのジジイは……死期が近くなると頭のネジが飛んでいくんですねえ。

ニコニコと振り返る爺さんに釣られ、こちらへと歩いてくる提督ちゃんに声をかけられたまでは別によかった。だが、提督ちゃんの頭でニヤニヤしている外務大臣と、目を泳がせるリーダー＆班長がどうしても気になる。前にこんなことがあつたような……。

それからは資材の搬入を手伝い、ついでに地下倉庫の建設に乗り出して時間を忘れていた。捜索していたらしい時雨から強引に止められ、 庁舎に着いた頃には夜中で自分もビックリしている。

「明日こそ歓迎会するから、絶対に忘れないで」

「…………すみません」

「じゃあ今日はこの部屋でゆっくり休んでね。明日僕が起こしにくるから」

「はい。あ、待つた。聞きそびれたが、あの時はどうして中将が居酒屋にいることがわかつたんだ？ 爺さんも初めて入ったと言つてたんだが」

「庭の土に書いてあつたんだ」

「え？」

「あの木の下に、居酒屋へ急げつて書いていたんだ。本当だよ？」

外務大臣がニッコニコ。部屋の隅に隠れようと/orリーダーと、机に避難しようとする班長。

そうか、何かがおかしいと思つたら貴様らだつたのか……。

「おやすみ。これからよろしくね？」

「……よ、ようしく。時雨もゆつくり休んでくれ」

時雨は退室した、さあ処刑の時間だ。

「申し開きを聞こう」

「くく、たいへんだつたなごしゅじん。これからいそがしくなるぜ？」

「言いたいことはそれだけか？」

「……え？ あの、けつこうおこつて——あぐ！ うふ、むれてる！ すげえむれててすっぱい！ ああああああ！」

「次は貴様だ」

「ヒイイ!?」

戦士たるもの、いつだって常に戦場の心得を忘れてはならない。

その日は夜明けまで夜戦の訓練を行い、妖精たちと共に身を引き締めあつた。

設定を盛られまくるネ級♂

姿を例えるなら羞花閉月。その美しさに花が恥じらい月は身を隠す。

陸では神馬となり、海では七つの海を統べる冷徹なる女王。その正体は破壊を司る神と見られ、佐々木中将が自らの寿命を生贊に召還したとされている。

戦いにおいては言わずもがな、武芸百般に通じた鈍器のエキスパート。主に接近戦を好み、振るわれた雷光の如き一撃は天をも穿つという。バナナが好き。

以上が倉庫に穴を掘っていたケンタウロスの正体だそうだ。こんな噂を信じてしまうピュアボーイ&ガールにはカウンセリングをおススメするがな。

「んで、他に隠していることは？」

「か、隠してなんかないのです。聞かれなかつただけなのです」

「ちゃんと話し合つたよな？ 提督ちゃんに会う予定はないから、顔面ノーガードでもいいじやんつて言つたのは誰だ？ 言つてみろ大臣！」

「あ、そつかうつてごしゅじんもなつとくしてたじやないか。ほんとうはケンタウロスもきにいつてるクセに！」

「口答えかこの野郎！ また労働した後に挟んでやる」

「イヤだ！ もうすっぱいのはイヤだ！」

「まあまあごしゅじん。けつかてきにしんかいせいかんのあらたなじようほうもえたのですぞ？ ごてにまわるよりははるかによいでわ？」

「そう、か？ そうだな、確かにそうかもしない。すまん、お前たちばかりを責めすぎた」

「……いえ、我々も勝手なことして、ごめんなさいなのです」「いいんだ。俺のためにがんばってくれたのはわかっている。これで

仲直りしよう

「へへ、おう！」

でも気が取まらないからリーダーと大臣は鼻の穴に突っ込んでおこう。先ほど風呂を借りちやつたから挟めないのが残念だ。もう窓の外は美しい朝焼けに照らされている。

なんとなく庭を見下ろすと、こんな朝早くから爺さんが散歩をしているのが見えた。

そういえば昔、俺の爺ちゃんも夜中いなくなつて大騒ぎになつたつけな。まさか爺さん……よく安心したり、気が抜けるとヤバいとは聞く。い、一応確認だけはしとくか。

ケンタウロスキットに足を入れて装着すると、ガショント小気味のいい音がしてドッキング完了。最後に不具合がないのを確認し、班長を肩に乗せて玄関から庭へと向かつた。

そこで爺さんは木を見上げたり、地面を見てはニッコリとほほ笑んでいた。これマジでいつしまつたのでは……。

「爺さん大丈夫か？」

「ほ？ ケンタツキー君か、おはよう」

「……おはよう。ビビらせないでくれ、徘徊してるかと思った」

「君も存外に失礼じやな。ほほ、これを見てごらん」

「ああそれか。時雨から聞いたよ」

「昔はこんな不思議なこともあつたのう。こうしてまた起きたのはただの偶然ではあるまい。よく橘君も言つておつたよ……これは妖精さんのいたずらだと——ほ!?」

足元を見ると、班長が土にハゲと書いていた。
これ、失礼なことはやめなさい。

「……ケンタツキー君、わしはやるぞ」
「え、今から育毛を？」

「失った毛根は戻らんよ。そうではなく目が覚めたのだ。味方同士で争つていては、深海棲艦に勝てぬと思い奴らを放置してしまった。もしもあの頃に戻れたのなら、自分の頭をぶち抜いてやりたいのう」

「…………」

「……には橘君と君がいる、だが佐世保には艦娘を労う者がおるかさえもわからんのだ。大切に扱っているならば文句はない、だがそうでないのなら……それをこの目で確認せねばならんでの」

「待て、冗談だよな？ 契約違反はいただけない。それに佐世保を通り越して天国に逝つたらどうする気だ？」

「まだまだ死なんわい！ 君との約束も増えたからの、ほほ」

爺さんは語り始めた……佐世保の艦娘は真実を知らないのだと。そもそも、艦娘を生み出せる唯一の提督をなぜ殺害したのか？ その理由は西の連中とやらの誤解が原因だつた。

提督ちゃんのお姉さんは、艦娘と共に深海棲艦を次々と打ち破つた。当時は敗北するという危機感もなく、彼女の艦娘を生み出す技術ばかりに目が向けられていたそうだ。

お姉さんは上層部にも包み隠さず説明したが、その内容を信じたのは爺さんただ一人だけ。将校らは自分たちを嘲笑していると勘違いし、彼女は恨みを買つてしまつたという。

やがて彼女が勤務する佐世保に調査員が送り込まれ、取り返しのつかない誤解が生まれた。

佐世保鎮守府の工廠には、艦娘を生む不思議なタンクがある……

と。

あとはお察し、艦娘は二度と生まれなくなつたわけだ。

「誰一人妖精さんを信じなんだ。すでに艦娘という不思議な少女を目の当たりにしても、目に見えぬものを信じるのは難しいからの」「復讐するか？」

「君が言うと怖いのう。橘君は家族を守りたくて提督になつた。それはわしも同じこと、そしてわしら軍人の使命は国を守ることじや。そ

れだけは忘れておらん……だが、このまま終わらせてよいのかね？
否である！」

爺さんがガチギレしてる……ど、どうしたんだよいきなり？

「できるできないではない、やるのだ。佐世保の状況次第じゃが、いずれ君の動きに合わせられるよう死力を尽くす。後ほど連絡をするから、みなを頼むぞい」

「本当の死力になるからやめろって！ しかも今から行くのか？ せめてみんなと話を——」

「わしは君と一緒に恥ずかしがりやさんでの。ほほ」

「このつ……リーダー、爺さんに何人か付けてやれないか？ もうなんでもいいから、とにかく助けてやつてほしい」

「おうふ、お任せくださいなのです！」

爺さんは深々と将校帽をかぶりニヒルに笑う。声をかけても振り返らず、必ず戻ると宣言して庁舎を出ていつてしまつた。

昨日はメソメソしていたのに、いきなりやる気を出しやがつて……鼻から抜いたリーダーが選りすぐりの精銳を付けてはくれたが、大した干渉はできないだろうな。

どいつもこいつも本当に勝手な奴ばかり……ああもういい、腹減つた！ メシ食つて穴掘ろう。

「（こ）しゅじん、（こ）き（こ）ぼうのしなができましたぞ」

「おお、ついにできたのか！」

あれから食堂に向かうと、食事の準備をしていた提督ちゃんに力

レーをこちらがそうしてもらえたんだ。これが美味しいのなんの。完熟バナナに匹敵するほどのおいしさで、龍驤がうるさかつたのも納得できる。

部屋には時雨たんへの書置きを残し、朝っぱらから港にある地下倉庫の建設（穴掘り）に取り掛かっていた。といつても、妖精たちのサポートが凄まじいので大した苦労もないが。

「……こちらが拳銃型試作单装砲です。でも貧弱な人間の兵器を模した役立たずのうんちっちなのです！」

「やたら不機嫌だなりーダー。俺は指でしかトリガー引けないんだから仕方ないだろ？ でも、ちゃんと作ってくれてありがとうな」

「我々はご主人さまに忠実なのですよ」

「はやくうつてみようぜ！」

「よし、じゃあいくぞ？」

俺は艦娘や深海棲艦のような戯装ができなかつた。なら拳銃でも作ればいいじゃない、そう思つて以前から妖精たちに依頼をしていた。

憧れのリボルバータイプを所望したが、構造をうまく説明できず却下された。その結果、单装砲にグリップとトリガーを付けただけという悲しい仕上がりになつていて

スッと構え、海に向かつて撃つ……左手は、添えるだけ。

トリガーを引くとズンッ！ と地鳴りのような発射音が響き、弾丸が海面をめくるように水しぶきをあげさせた。

うん、たぶんイ級も一発じや落とせないだろうが、あるとないとでは安心感が違うはずだ。

「ではご主人さま、次はこれを」

「……俺が掘り出した岩をどうしようと？」

「これを先ほどの場所に本気で投げてほしいのです」

「?? 別にいいけど」

妖精たちが離れたのを確認し、振りかぶつて強めにぶん投げる。

それは弾丸以上の速さで海面に激突、発生したかすかな衝撃波が頬を撫でていった。

こんな派手な水しぶきはイルカシヨーでもなかなか見られない。無駄にはりきつたイルカが、無意味に水をぶちまけるアレだ。着岩の衝撃で波紋のように波まで立つてゐるし……。

つまり、岩のほうが痛そうだった。

「まあこうなるよな」

「どうせんでしょう。ゴリラがなぜどうぐをつかわないのか？ それはつかうとよわくなるからです」

「チンパンだとなんと言えばわかるのですか？ 思い込みはゴリラの始まりなのです」

「リーダーこそチンパンのもうしゆうにとらわれ、まるでげんじつがみえておりませんな。あのとうてきりよくをみてもなおしゆちようされるおつもりか？」

「じゃあ、ごしゅじんはゴリラがたチンパンジーってことでどうだ？」

「とりあえず、お前らは全国のゴリラとチンパンジーと俺にあやまれ」

なんで蔑称の代名詞みたいな扱いになつてんだよ……。

でも確かに岩を投げたほうが強かつたのは事実か。この試作品も携行性と装填のため、威力は抑えて耐久性を重視しているとのこと。

「でも、まだ改良の余地はあるだろ？」

「もちろんあるですよ？ でもご主人さまは直接殴つたほうが早いのです」

「ぎょろいにかんしてもどうようですな。なぐつてしまふさせ、てきのたいないにねじこんでばくはさせればよろしい」

「両手に岩と魚雷持つて突つ込むとか気が触れてんだろ……」

「そのためのたてをつくつてるから、もうちよいまつてくれよな！」

「そうか、ならサイドアームの開発も頼むぞ？ その盾を持つ腕が足りないんだ」

もうめんどくさいからガンダム作ってくんないかな？

大きく伸びをして作業に戻ろうとしたら、明石っぽい少女が倉庫の扉からジッとこちらを見つめていた。